

醍醐寺と重源

京都市考古資料館 館長 梶川 敏夫

1 俊乗房重源(しゅんじょうぼう ちょうげん)

重源(保安2年(1121)～建永元年(1206))は、平安時代末期から鎌倉時代の僧で、奈良の東大寺の大勧進職(復興責任者)として、源平の争乱で焼失した東大寺の復興を果たした僧として知られ、号は俊乗坊とも記す。

京都の紀氏の出身で紀季重の子。長承2年(1133)に13歳で真言宗の醍醐寺に入って出家し、その後、養和元年(1181)の61歳のときに東大寺の勧進職になるまで、醍醐寺に所属していた。

重源は、浄土宗開祖である法然に学び、四国・熊野など各地で修行し、大陸の唐(宋)へ三度の渡航経験があるとされ、「本朝高僧伝」(『大日本仏教全書』所収)には47歳で仁安2年(1167)に南宋へ渡り、翌年に栄西と一緒に帰国した記録がある。重源は、建築や土木に関する知識、技術者などの人脈、念仏集団の組織力をかかわれて、養和元年(1181)、重源が60歳の時、前年の治承4年(1180)に、平重衡らの南都焼き討ちで焼失した東大寺の再建勧進職に任じられ、この後に86歳で示寂するまで25年間を東大寺等の再興に尽力した。

大仏修造や大仏殿の再建など未曾有の大事業を、飢饉や地震、争乱の中で、宋の鋳物技術者陳和卿などを使って「支度第一俊乗房」と評された周到な計画性と実行力、推進する強い意志を持ち、朝廷や鎌倉幕府などの協力を得て成し遂げた。大仏様と呼ばれる新しい建築様式を駆使して再建された東大寺は、文治元年(1185)8月28日に大仏の開眼供養が行われ、建久6年(1195)には大仏殿を再建し、建仁3年(1203)に総供養が行われている。

重源は醍醐寺の真言宗の僧であるが、自らを「南無阿彌陀仏」と称し、各地に阿彌陀堂や阿彌陀如来像を建立したが、晩年にその業績をまとめた『南無阿彌陀佛作善集』を書き残し、東大寺浄土堂において86歳で示寂した。

このような功績から、重源は生前「大和尚」の称号を贈られ、彼の死後は、臨済宗の開祖として知られる栄西が東大寺大勧進職のあとを継いだ。

現代の東大寺には、重源時代の遺構として南大門、開山堂、法華堂礼堂(法華堂の前面部分)が残っている。

そのほか、建久8年(1197)、播磨別所に造られた浄土寺浄土堂(兵庫県小野市)が現存しており、国宝に指定されている。また、重源が自ら著した『南無阿彌陀佛作善集』には、下醍醐寺の栢杜堂に一字を造立して九体丈六仏を安置、さらに上醍醐には経蔵を建立して大湯屋や鉄湯船・湯釜を作ったとの記述がある。

この上醍醐寺にあった経蔵は、建久6年(1195)に重源建立にかかる重要なものであったが、昭和14年(1939)に周囲の山火事が建物へ類焼し、惜しくも焼失している。

2 大仏様

大仏様は日本の伝統的な寺院建築様式の一つで、当時の中国(南宋)の福建省辺りの建築様式に通じるといわれる。

日本の建築は飛鳥、天平の時代に中国や朝鮮半島の影響で建立された寺院や宮殿建築などがあるが、その後、平安時代に至るまで建築は日本独



写真1 「重源上人坐像」(国宝)
東大寺には重源を安置した俊乗堂があり、「重源上人坐像」(上写真)を安置する。この像は運慶作とする説もあり、鎌倉期の彫刻でリアリズムの傑作とされる。そのほか、浄土寺{播磨別所・重文・天福二年(1234)東大寺像の模作}、新大仏寺(伊賀別所・重文)、阿彌陀寺(周防別所・重文)にも重源上人坐像が現存する。(HPより転載)



図1 現在の中国大陸と福建省

特の発展を遂げていた。鎌倉時代に再び、中国の建築技法とされる大仏様が伝わってきたことになる。構造的には貫といわれる水平方向の材を使い、柱と強固に組み合わせて構造を強化している。また、貫の先端には繰り型といわれる独特の装飾を付けているほか、斗拱では大斗を含む卷斗・方斗の下方が台状になった皿斗が用いられる。

この建築技法は一部の飛鳥時代の建築(法隆寺)でも見られ、入宋経験のある重源によってもたらされた様式で、従来の建築様式である和様、また鎌倉時代後期から禅宗寺院に採用された禅宗様に対する用語で、禅宗様とは共通する部分も多く、合せて鎌倉新様式(宋様式)と総称される。



写真2 東大寺大仏殿(上)と南大門(下)

3 源 師行{? ~承安2年(1172)}

源 師行の生年は不詳であるが、父の源 師時(1077~1136)は、村上源氏の嫡流左大臣源俊房(子の勝覚は醍醐寺座主)の子(次男)で、師時は鳥羽殿の北殿にあった勝光明院を造営(日記『長秋記』)したことで知られる。その子である師行は、永元年(1118)に山城守に任ぜられ、美福門院(藤原得子:父は権中納言・藤原長実。母は左大臣・源俊房の女)の従兄弟にあたることから、鳥羽法皇の信任を得て院司となり、康治元年(1142)に正四位下長門守に任ぜられた。久安2年(1149)には高松殿の成功により正四位上に叙され、長門守に重任を許されている。久安5年(1152)には、美福門院の別当と大蔵卿に任じられ、支度大蔵卿とも称されるが、程なく出家して醍醐寺に隠退し、久寿2年(1155)頃に下醍醐に栢杜堂を建立している。

「尊卑分脈巻第十」

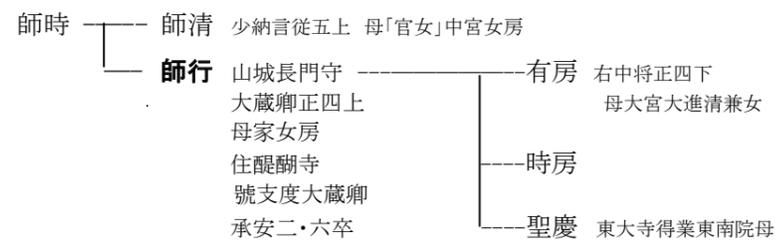


写真3 上醍醐寺の経蔵跡(上方から)

4 栢杜遺跡(伏見区醍醐柏森町) 史跡醍醐寺境内(飛地) 指定面積9,683.32㎡。

この遺跡は醍醐寺の子院跡で、伏見区にある醍醐寺の南方約1km、醍醐寺子院の一言寺の南隣接地にある。

平安時代後期から鎌倉時代にかけての寺院跡で、元は大蔵卿と呼ばれた源 師行の別業(別荘)であった。

『醍醐寺雑事記』によると、久寿2年(1155)頃、栢杜堂に大蔵卿堂と呼ばれる檜皮葺きの八角二階建ての建物と、九体丈六堂及び三重塔があり、この寺は源師行が建立した栢杜(かやもり:現在は柏森町)という所にあったとする。

一方、重源は優れた建築家としても知られ、中国南部から伝わったとされる独特の建築様式「大仏様」を導入し、その技術で鎌倉時代に東大寺大仏殿を再建(この大仏殿は現存しない)し、またその南大門(現存)や、兵庫県小野市にある浄土寺浄土堂(国宝)を建立した。この時に使われた新しい建築技術が、柱に直接穴を空けて桁や梁材を差し込む工法で、巨大な建築物や屋根の下に大きく空間を取れる利点があり、独特の建築部材(挿し肘木や、斗の下に皿状台をつける皿斗)が使われており、このような建築部材が見つければ、大仏様と判るものである。

発掘調査は、この特異な形状をした建物である八角建物跡か、重源が導入した特殊な建築様式である大仏様の遺構や遺物の確認を目指して行われた。

当時の栢杜遺跡は、山科区在住の陶芸家が、この地に古瓦が散布しているのを偶然発見し、それまで古瓦散布

地(窠跡・寺院跡?)として『京都市遺跡地図』に掲載されていた。その後、この場所を含む一帯に開発業者が宅地開発を計画したことから、事前の予備調査を経て、1973年9月12日～翌年3月末まで発掘調査が行われた。

発掘調査では、敷地の北側から文献史料と一致する、一片が約9mもある平面八角形の大規模な建物跡が検出され、この建物の東側には別の建物が取り付き、眺望のよい西側には庭園と舞台風の建物が張り出していた。

この八角円堂跡の南側雨落溝付近には、一部雨落溝を壊して方形の穴が4箇所検出され、穴中には木材を棺桶大に切断し、中央に細長い穴を空けた材木が埋められていた。最初この遺構は、お墓ではないかと考えたが、中央の穴から先の尖った木製の楔がそのまま見付き、またその方向が八角円堂の南と南東の柱の延長部分に当たることから、八角円堂が地震か土石流で上方から見て半時計方向にねじれて傾き、それを支えるための地面に設けられた倒壊防止施設の痕跡と判明した。また八角円堂跡の南方からは、柱間寸法が6.09m(20尺)もある三間の方形建物跡が見つかり、その建物跡東側からは大量の大仏様式の建築部材が出土した。これは集中豪雨のため、背後にあった谷川が氾濫して大量の土石流がこの建物を破壊・埋没させたことにより残ったものと判明した。

約半年間行われたこの調査で、文献史料に記載のある八角円堂・方形堂(九体阿弥陀堂)を検出したが、三重塔跡は見つからず、今回の調査地外か、土石流のために既に消滅しているのではないかと判断された。

この遺跡は、文献上の三重塔跡は未確認ながら、平安時代後期の特異な八角円堂跡(付属建物及び庭園が伴う)及び、重源造立の大仏様による方形堂(九体阿弥陀堂)跡と、そこから見つかった大仏様の建築部材や多種多様の出土遺物のほか、それを裏付ける文献史料の存在、さらに土石流によってパックされて遺構の残存状況が良好であることなどから保存が決定されて埋め戻され、調査後9年目の昭和58年(1983)に史跡醍醐寺境内(飛び地)に追加指定(5,345.36㎡)され、文化庁補助により京都市が土地を開発業者から公有化し、仮整備が行われた。

その後、史跡指定地の南及び南西部の未調査地について、1995年に遺跡範囲確認のため試掘調査を京都市埋蔵文化財調査センターが実施、その後、残る民有地の調査を2001～2004年にかけて実施した結果、1974年の調査地外の南方から三重塔跡(一辺10m)を検出、栢杜堂は西下がり境内地に、等高線に沿って北から八角円堂・方形堂・三重塔がそれぞれ中心間約42m間隔で、南北に一直線と並ぶ特異な伽藍を持つ寺院と判明した。

ただし、1974年の調査で検出されている方形堂は、浄土寺浄土堂とほぼ同じプランで、重源建立の九体阿弥陀堂であることは確実であるが、建立時期は大仏様式による建築技法導入の文治元年(1185)の大仏殿開眼供養以後と考えられ、久寿2年(1155)の源師行建立の九体阿弥陀堂は、先行する別の堂ではないとも考えられている。

以上の調査結果から、文献史料の正確さを裏付ける成果となり、京都市が改めて土地の史跡指定及び公有化を行い、現在、約9,683㎡の史跡指定となって、将来、史跡公園として整備される予定地になっている。

【栢杜遺跡に関する経緯】

- ① 1973年4月13日 付近の土地開発に伴い37箇所のグリッド掘りによる予備調査を実施(六勝寺研究会)
- ② 1973年9月12日～1974年3月末まで発掘調査を実施(鳥羽離宮跡調査研究所)
- ③ 1983年 国の史跡指定を受け、土地の公有化、一部仮整備。(史跡醍醐寺境内追加指定→5,345.36㎡)
- ④ 1995年 遺跡範囲確認のため指定地の南方で試掘調査を実施(京都市埋蔵文化財調査センター)京都市
- ⑤ 2001年11月30日～12月26日 史跡指定地外での発掘調査 (公財)京都市埋蔵文化財研究所
- ⑥ 2002年10月21日～12月25日 史跡指定地外での発掘調査 (公財)京都市埋蔵文化財研究所
- ⑦ 2003年11月19日～2004年1月29日 史跡指定地外での発掘調査 (公財)京都市埋蔵文化財研究所
- ⑧ 2005年 調査成果により、史跡範囲の確定→土地公有化(追加指定→4,337.96㎡) 京都市

【栢杜遺跡関係文献】

- 1 『醍醐寺雑事記』巻5 「大蔵卿堂八角二階 九躰丈六堂 三重塔一基各檜皮葺 本佛阿弥陀丈六像 願主大蔵卿正四位上源朝臣師行之建立也 敷地者三宝寶院領也」
- 2 『醍醐寺雑事記』巻7・八裏書 具注曆 久寿二年(1155) 六月二十一日条 「大蔵卿栢杜堂供養御導師 讚嘆廿口」

- 3 『南無阿弥陀仏作善集』 「上醍醐 奉造立 下醍醐栢杜堂一字并九躰丈六 奉安置皆金色三尺立像一 上醍醐経蔵一字 奉納唐本一切経一部 大湯屋之鐵湯船并湯釜
- 4 『醍醐寺新要録』巻第五 座主次第云 建久六年(1195) 十一月七日 奉乗房聖人被施入唐本一切経於当寺 柏森大蔵卿入道師行堂奉渡 為讚嘆 寺僧十人岡屋津参向

【参考文献】

- 『国宝 浄土寺浄土堂修理工事報告書』国宝浄土寺浄土堂修理委員会編。昭和34年9月。
昭和32年3月から昭和34年まで、2年7箇月の工期で解体修理が行われた。
- 小林 剛『俊乗房重源史料集成』奈良国立文化財研究所史料第四冊。奈良国立文化財研究所、昭和40年3月。
- 小林 剛『俊乗房重源の研究』、昭和46年(1971)6月30日。
- 杉山信三ほか『栢杜遺跡調査概報』鳥羽離宮跡調査研究所、1975年10月。
- 小森俊寛「Ⅲ 栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成13年度、京都市文化市民局2002年3月。
- 小森俊寛「Ⅴ 栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成14年度、京都市文化市民局、2003年3月。
- 南孝雄「Ⅳ 栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成16年度、京都市文化市民局、2005年3月。
- 前田義明「栢杜遺跡の調査」—遺跡からみた平安時代以降の寺院—、講座6、第88回京都市考古資料館文化財講座資料、平成8年(1996)2月24日。
- 平成23年度 岡山市埋蔵文化財センター講座資料 岡本芳明「大勸進重源とその足跡」 2012年1月 ほか。



図 2 上・下醍醐寺と栢杜遺跡の位置(国土地理院地図転載)



写真 4 1974年、発掘調査中の八角円堂跡(南から)合成写真

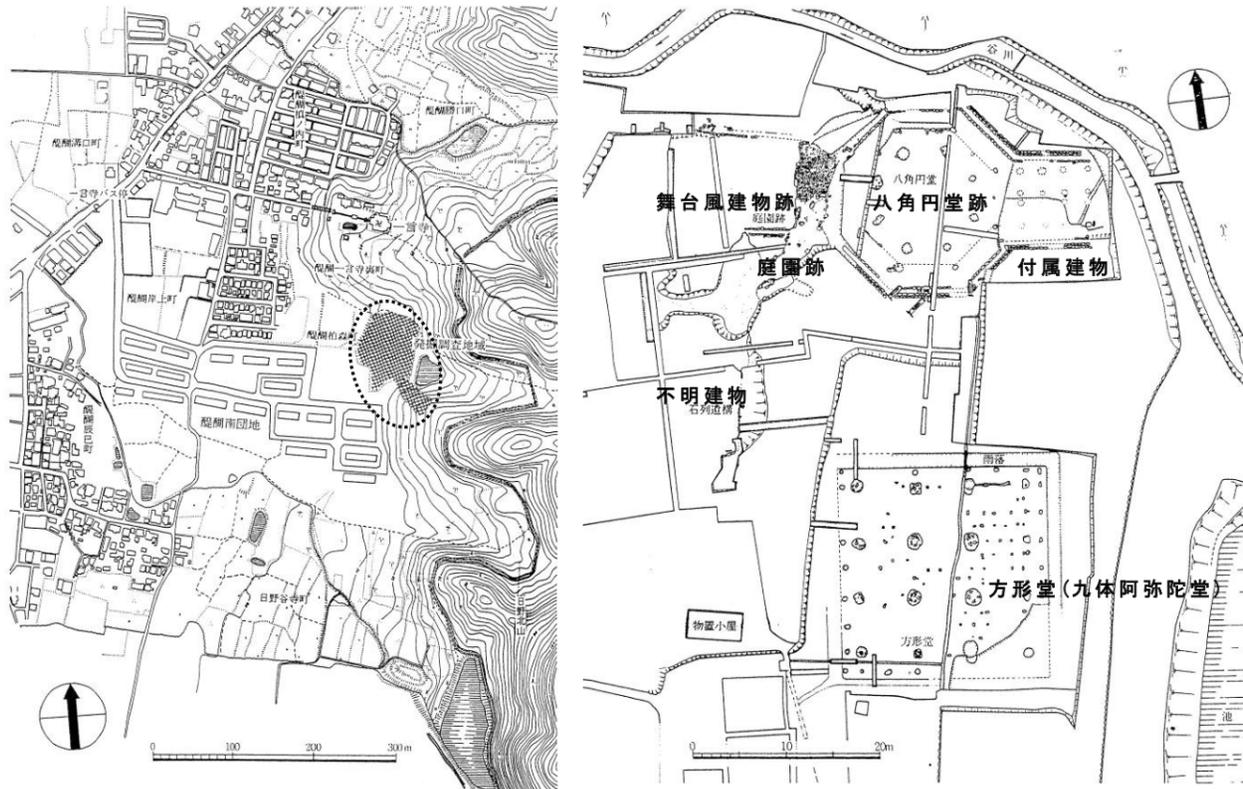


図3 1974年当時の調査地付近の見取図と発掘調査平面図(鳥羽離宮跡調査研究所)

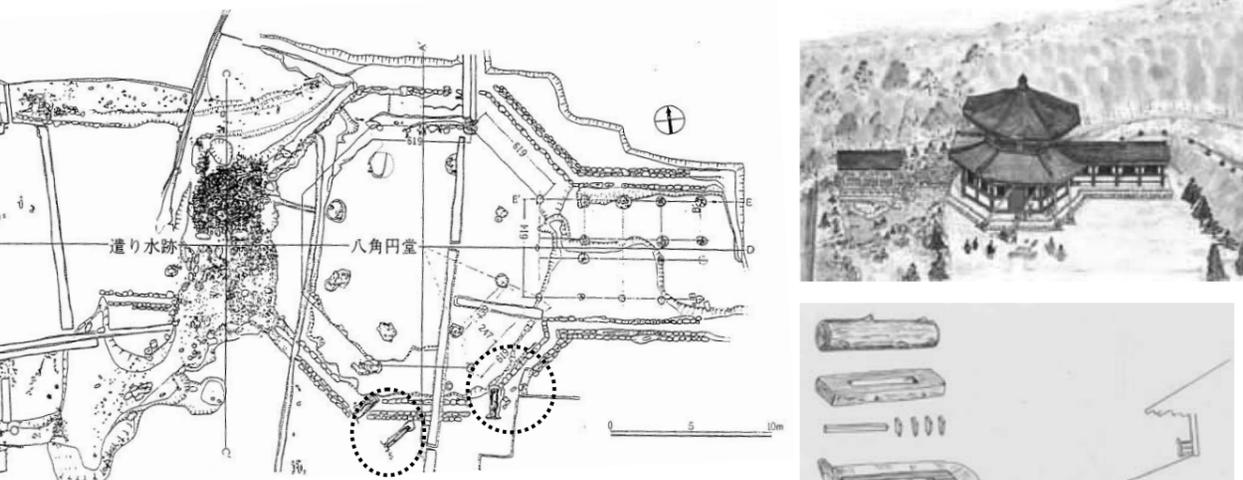


図4 八角円堂跡と庭園跡及び倒壊防止用の柱固定遺構の位置

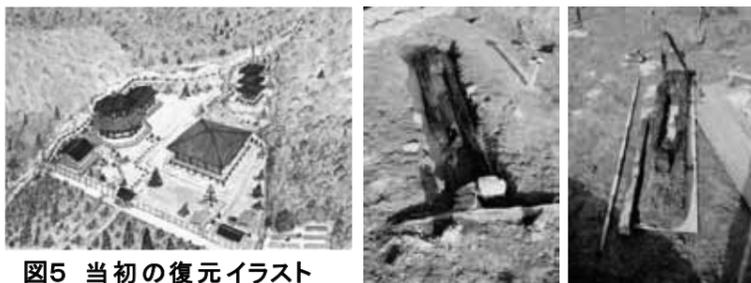


図5 当初の復元イラスト

八角円堂跡の南4箇所で見出した建物倒壊止めの支柱固定遺構の写真(左2枚)と復元案(上の図2枚)

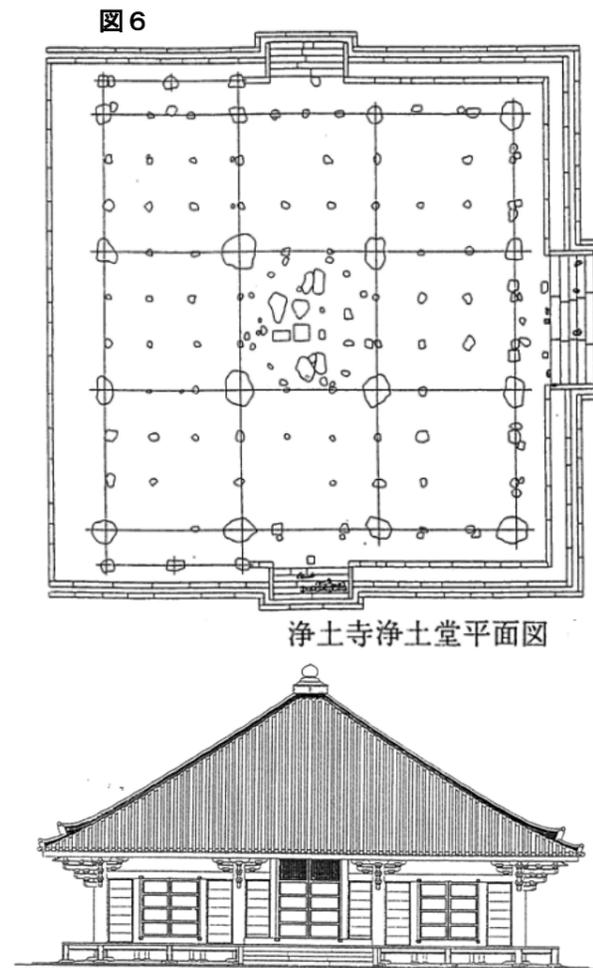


図6

浄土寺浄土堂平面図

図8 浄土寺浄土堂立面図

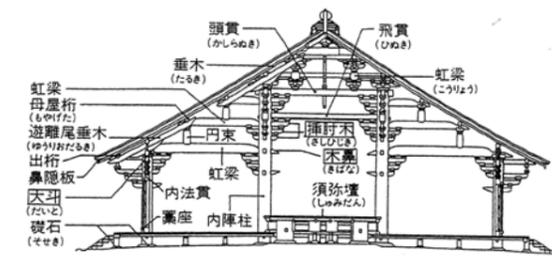


図9 浄土寺浄土堂断面図



写真6 現在の浄土寺浄土堂(国宝:兵庫県小野市)

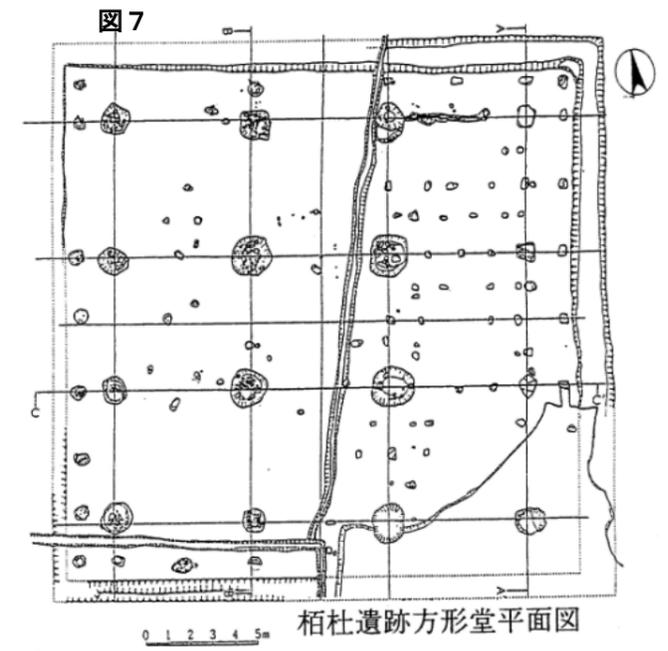


図7

栢杜遺跡方形堂平面図



写真5 栢杜遺跡 方形堂(九体阿弥陀堂)跡 北から

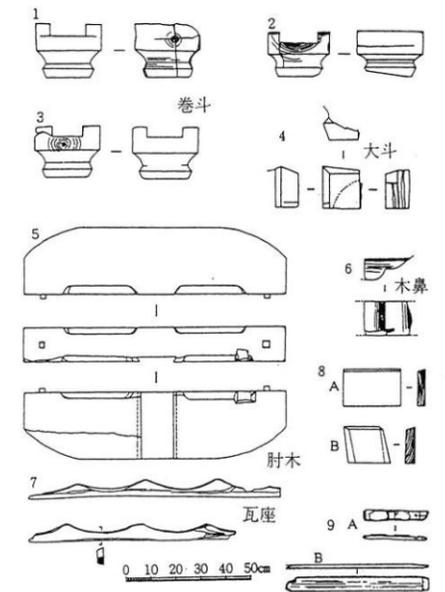


図10 栢杜遺跡、方形堂跡出土建築部材(大仏様)実測図

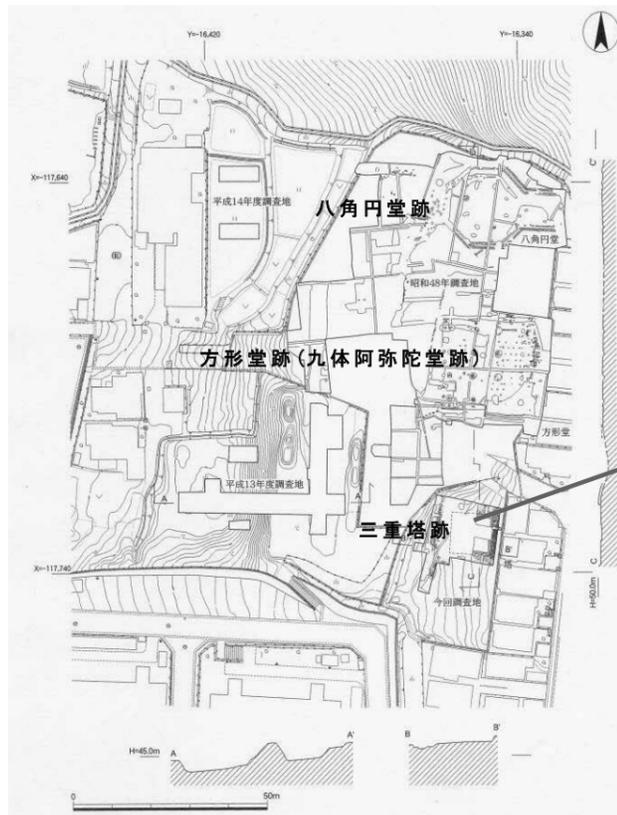


図11 2005年の発掘調査付近見取図と検出遺構図

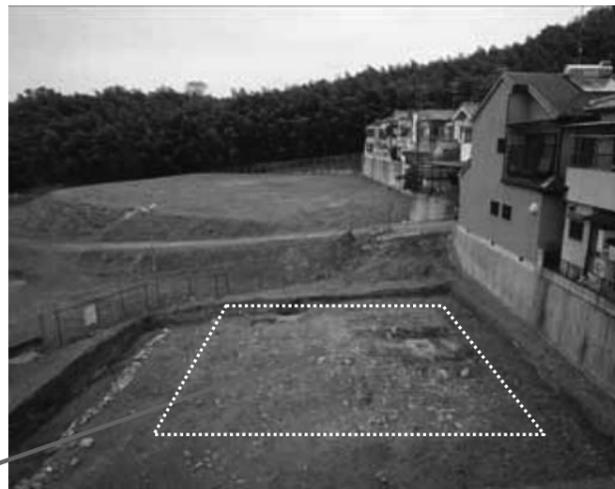


写真7 2004年の発掘調査で三重塔跡を検出(南から)

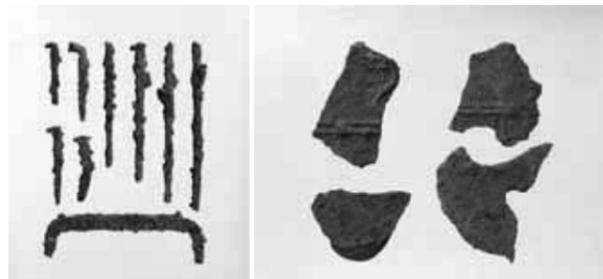


写真8 三重塔跡出土の鉄製品(釘・鏝・風鐸片)



写真9 1974年の栢杜遺跡発掘調査地全景写真(西から)



図12 最近の栢杜遺跡復元イラスト(西から)



写真10 方形堂(九体丈六堂)跡(東から)



写真11 方形堂遺物出土状況



写真12 八角円堂跡(南から)

重源(年齢)及び醍醐寺関係略年表

和暦	西暦	年齢	主な事柄
保安二	1121		重源が京都で生まれる(紀氏の出身)
長承二	1133	13	重源 醍醐寺で出家
保延三	1137	17	重源 四国を巡る修行
保延五	1139	19	重源 大峰山ほかで修行、後に高野山で修行
久寿二	1155	35	『醍醐雑事記』巻第五 大蔵卿堂八角二階 九躰丈六堂 三重塔一基各檜皮葺 本佛阿弥陀丈六像 願主大蔵卿正四位上 源朝臣師行之建立也 敷地者三寶院領也 『醍醐雑事記』巻第七、第八裏書 6月21日 大蔵卿堂栢杜堂供養御導師 参衆廿口
仁安二	1167	47	重源 宋に渡り、翌年に栄西と共に帰国。この頃、信濃善光寺に参詣する
承安2	1172	52	源 師行没 (これ以前に師行の栢杜堂→八角二階建物・九体阿弥陀堂・三重塔が建立)
安元元	1175	55	重源、栄西が発願した鎮西誓願寺の本尊丈六阿弥陀像に結縁。周防の材を造像に当てる
安元二	1176	56	重源 高野山延寿院に鐘一口を施入。「入唐三度上人」と自称
治承四	1180	60	源平の争乱で東大寺が焼ける
治承五	1181	61	重源 東大寺を訪れ焼け落ちた大仏を拝して落涙する。法然房源空の推薦により東大寺復興責任者(大勧進)となる。宣旨を賜り勧進帳を作成、一輪車六両を造って諸国を勧進
養和元	1181	61	東大寺大仏の螺髪を鋳始める
寿永元	1182	62	宋の技術者・陳和卿に東大寺大仏の鋳造に加わることを要請する
寿永二	1183	63	重源 3月17日 上醍醐 大湯屋之鐵湯船并湯釜を造る。(河内国の鋳物師・草部是助(後に大仏頭部鋳造)が湯釜を鋳造。東大寺大仏の鋳造に草部是助らが加わり、翌年完成する。この頃から、重源は自ら「南無阿弥陀仏」と称し、人々に阿弥陀仏号を付け始める
元暦二	1185	65	源頼朝、東大寺に黄金一千両などを寄進。「壇ノ浦の戦い」にて平氏が滅びる
文治元	1185	65	東大寺大仏開眼供養
文治二	1186	66	周防国が東大寺造営料国になり、重源が責任者。翌年より、杣から木材を切り出す
文治三	1187	67	源頼朝、東大寺復興の材木運搬を妨害しないよう周防国の地頭に命ずる この頃、重源が周防阿弥陀寺創建。また重源は備前荒野開発の妨害停止を奏上
建久元	1190	70	東大寺大仏殿上棟
建久三	1192	72	後白河法皇崩御。重源、播磨国大部荘を東大寺領として復興、播磨浄土寺を建立
建久四	1193	73	播磨国・備前国が東大寺造営料国となる
建久五	1194	74	頼朝、大仏光背のための砂金三百三十両を施入。頼朝、守護・御家人に東大寺再興の助力を命ずる。仏師快慶など東大寺中門の多聞天・持国天像を作る 播磨浄土寺浄土堂の上棟
建久六	1195	75	大仏殿・中門などが完成。東大寺供養が行われる。後鳥羽天皇、源頼朝が出席。重源、大和尚号を得る。 11月7日、春乗房聖人被施入唐本一切経於當寺 栢森大蔵卿入道師行堂奉院 為贊嘆… 「醍醐寺座主次第 第23代 法眼實継條」 重源は、この頃までに大蔵卿栢杜堂に九体阿弥陀堂を建立したか?
建久七	1196	76	重源 魚住泊・大和田泊の改修計画が認められ、国衛に協力が命じられる。宋の石工・伊行末等、東大寺大仏殿の石の脇土像、四天王像、中門の石獅子などを造る
建久八	1197	77	播磨浄土寺浄土堂の完成供養
建久九	1198	78	3月9日 上醍醐寺一切経蔵落慶供養
正治元	1199	79	源頼朝が亡くなる 東大寺南大門が再建される
建仁二	1202	82	重源 狭山池を改修する。重源、伊賀国に新大仏寺を建てる
建仁三	1203	83	東大寺南大門の仁王像、運慶・快慶らにより造像を開始。東大寺総供養が行われる。重源、活動の実績を『南無阿弥陀仏作善集』にまとめる
元久元	1204	84	重源 東大寺東塔の造立を開始
建永元	1206	86	重源 東大寺浄土堂で示寂する(86歳)